☆年間第26主日（9月25日）の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読　（アモスの預言 6 章 1, 4-7 節）

主は言われる。
災いだ、シオンに安住し
サマリアの山で安逸をむさぼる者らは。
お前たちは象牙の寝台に横たわり
長いすに寝そべり
羊の群れから小羊を取り
牛舎から子牛を取って宴を開き
竪琴の音に合わせて歌に興じ、
ダビデのように楽器を考え出す。
大杯でぶどう酒を飲み、最高の香油を身に注ぐ。
しかし、ヨセフの破滅に心を痛めることがない。
それゆえ、今や彼らは捕囚の列の先頭を行き
寝そべって酒宴を楽しむことはなくなる。

第二朗読（使徒パウロのテモテへの手紙Ⅰ6 章 11-16 節）

神の人よ、あなたはこれらのことを避けなさい。 正義、信心、信仰、愛、忍耐、柔和を追い求めなさい。 信仰の戦いを立派に戦い抜き、永遠の命を手に入れなさい。 命を得るために、あなたは神から召され、 多くの証人の前で立派に信仰を表明したのです。 万物に命をお与えになる神の御前で、そして、ポンティオ・ピラトの面前で 立派な宣言によって証しをなさったキリスト・イエスの御前で、 あなたに命じます。 わたしたちの主イエス・キリストが再び来られるときまで、 おちどなく、非難されないように、この掟を守りなさい。 神は、定められた時にキリストを現してくださいます。 神は、祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主、 唯一の不死の存在、近寄り難い光の中に住まわれる方、 だれ一人見たことがなく、見ることのできない方です。 この神に誉れと永遠の支配がありますように、アーメン。

福音朗読（ルカ 16 章 19-31 節）

　そのとき、イエスはファリサイ派の人々に言われた。「ある金持ちがいた。いつも紫の衣や柔らかい麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。この金持ちの門前に、ラザロというできものだらけの貧しい人が横たわり、その食卓から落ちる物で腹を満たしたいものだと思っていた。犬もやって来ては、そのできものをなめた。やがて、この貧しい人は死んで、天使たちによって宴席にいるアブラハムのすぐそばに連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。そして、金持ちは陰府でさいなまれながら目を上げると、宴席でアブラハムとそのすぐそばにいるラザロとが、はるかかなたに見えた。そこで、大声で言った。『父アブラハムよ、わたしを憐れんでください。ラザロをよこして、指先を水に浸し、わたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの炎の中でもだえ苦しんでいます。』しかし、アブラハムは言った。『子よ、思い出してみるがよい。お前は生きている間に良いものをもらっていたが、ラザロは反対に悪いものをもらっていた。今は、ここで彼は慰められ、お前はもだえ苦しむのだ。そればかりか、わたしたちとお前たちの間には大きな淵があって、ここからお前たちの方へ渡ろうとしてもできないし、そこからわたしたちの方に越えて来ることもできない。』金持ちは言った。『父よ、ではお願いです。わたしの父親の家にラザロを遣わしてください。わたしには兄弟が五人います。あの者たちまで、こんな苦しい場所に来ることのないように、よく言い聞かせてください。』しかし、アブラハムは言った。『お前の兄弟たちにはモーセと預言者がいる。彼らに耳を傾けるがよい。』金持ちは言った。『いいえ、父アブラハムよ、もし、死んだ者の中からだれかが兄弟のところに行ってやれば、 悔い改めるでしょう。』アブラハムは言った。『もし、モーセと預言者に耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から生き返る者があっても、その言うことを聞き入れはしないだろう。』」

朗読解説　―主任司祭より皆様へ―

　最近は連休に合わせて台風が襲来し、休みを楽しもうとしている人たちにとって意地悪な天気となっています。それでも季節はきちんと間違いなく変わろうとしています。夏の猛烈な暑さも今は思い出になりました。

今日の日曜日は「世界難民移住移動者の日」となっています。その多くは自分の国を捨てて、あるいは排斥されて定住できなくなった人々、戦争や紛争のために国を出て生活しなければならなくなった人々のため、祈りと献金をする日になっています。現在の私たちにとっても経済的に苦しい状況が続いていますが、もっと苦しむ人たちがいることを考え、寛大な心で献金するようにしましょう。
また昨日、村上康助神父様が無くなられました。89 歳でした。足立教会にも何度か来てミサをしてくださいました。お祈りいたしましょう。

第一朗読　（アモスの預言 6 章 1, 4-7 節）

貧しい人々を顧みることなく、安逸をむさぼる者たちに対する神の怒りが預言されています。この預言書の個所はルカ福音書で今日読まれるラザロの物語を思い起こさせます。現代の世界難民の多くの方々、また、国における迫害されている方を私たちはどのように思っているのでしょうか。この問題を避けて生きていくことは許されません。私たち一人ひとりにはできることは限られているでしょうが、自分にできる応分の協力はすべきなのです。無駄だとか意味がないことは何もないのです。主である神の誠実さは廃れることなく、私たちに報いてくださるからです。

第二朗読（使徒パウロのテモテへの手紙Ⅰ6 章 11-16 節）

エフェソの教会で指導的立場にあったテモテへの手紙です。信仰の戦いを立派に戦い抜くように激励しています。当時はまだまだイエス・キリストへの信仰が未成熟な時代でした。どのように生きていくことが信仰を守り抜くことになるのか、皆が模索していた時代でした。ですからパウロはテモテに対し、「落ち度なく、非難されないように掟を守りなさい」と勧めているのです。この掟とは何でしょうか。それはイエスが命じた「自分を愛するように、隣人を愛しなさい」ということでした。隣人愛の実践、それは貧しく困難のうちにある人々のために、身を捧げることを意味します。そしてそれはイエス自信がその生涯

を通して模範を示してくださっているのです。現代の今こそ私たちはこの掟に目を向けて実践しなければならないのです。

福音朗読（ルカ 16 章 19-31 節）

貧しいラザロと大金持ちの物語です。この物語は第一朗読のアモスの預言でイエスの言葉以前に旧約のイスラエルに告げられていました。神は貧しく生きる者の味方であることがはっきりしています。イエスはこの預言に駄目を押されたのです。「もし、モーセと預言者に耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から生き返る者があっても、その言うことは信じないだろう」と。預言者の言葉すなわち神の言葉を信じ、実践に移すことこそが大事なのだとイエスは言われるのです。今日のイエスの言葉をさっそく実践に移しましょう。

尾瀬沼：　大江湿原　（２０２１年）

P.S.

今日本の入管法が問題になっています。テロ対策の名のもとに多くの人権侵害が行われ、特に日本に逃れ、行き場所をなくした人に対し無理難題を押し付けているように思います。今日の「世界難民移住移動者の日はそのことにも目を向けるように私たちを促しています。この問題にもっと目を向け、関心を持ちましょう。

カトリック足立教会

主任司祭　野口重光